

昭和二十四年七月二十五日發行  
第三種郵便物認可  
(毎月一回、十五日發行)

(通第一四一號)

# 慈光

第十二卷 第十二號

## 目次

歎異の御涙と 近角先生の御教化……………	松村繁雄……………(10)
近角先生と嘉村文学……………	石原宥政……………(13)
心と真実……………	佐藤強三郎……………(17)
歎異鈔十三章講義……………	近角常観……………(2)



# 本願をさまたぐる程の悪なし

千四百年ほど昔、道生法師は、中国の長安の都で、羅什法師のもとにあつて仏典の翻譯に専念して居られました。そこへ四十卷の涅槃經の中、初めの六卷だけが印度から渡来した時、道生はこれを精読して、闍提成仏の説をたてました。闍提とは、斷善根、無信の徒で、一切の仏菩薩から捨てられるべき衆生であります。然し道生は、一切衆生悉有仏性と仏がかねて説かれていた以上、如何なる悪性人も必ず成仏すると説いたのであります。これを耳にした他の人々は、經典に明示されていないということを感じて、強く反対し、それは道生の妄想であり空想である、世の危険思想であると排斥し、遂に寺から放逐するに及びました。

やむなく道生は南方の虎邱山に登り、山中の石を並べて、「自分の説が仏意に順ずるならば返答せよ」と言つて、石に向つて説法すると、石は皆うなずいたと伝えられています。その後、涅槃經の全部が伝来し、果して闍提成仏の旨が五六個所に説いてあつたので、それまで道生を非難した人達も打つて變つて尊敬し神僧とあがめたのであります。

親鸞聖人はその涅槃經から、謗法・五逆・闍提は難治難化の者であらゆる仏弟子から捨てらるべき者であるが、弥

陀仏の本願醍醐の妙薬によつてのみ救い遂げられると述べられ、ことに悪逆の阿闍世の中に御自身の救いを見出されて、仏の大悲を渴仰随喜していられることは誰もよく知るところであります。

善導大師は生涯をかけて觀經を説破、そこに愚痴無智の凡夫、韋提希の救済を發見せられて、御自身をまた十悪五逆の下機の中に置かれて、極悪最下の凡夫が、極善最上の浄土に、仏智の不思議力ひとつで生れさせて頂けることを心血を傾けてお説き下されて、大師独り仏の正意を明らかにして下さいました。

凡そ真実の仏法者は、この地上に仏力によつて救い得られない程の悪人劣夫は一人も無いことを發見し、自身もその一人であると自照せられ、この不可思議な大徳音に随喜満悦されて、ここに智恩報徳の一念が湧然としておこり、生涯を貫ぬかれています。むべなるかな、和国の教主、聖徳太子は「人はなほだ悪しきもの鮮し」と、よろこびにふるりみ心をもつて「篤く三宝を敬え」と仰せられました。

聚墨記

# 歎異鈔十三章講話 (続)

## 近角常觀

持戒持律にてのみ本願を信すべくは、我等いかでか生死をはなるべきや。かかる浅ましき身も本願にあいたてまつりてこそげにほこられ候え。さればとて身にそなえざらん悪業はよも造られ候わじものを、また海河に網をひき、釣をして世を渡る者も、野山に猪を狩り鳥を捕りて命を繋ぐ輩も、商をし田畠を作りて過ぐる人もただ同じことなり。さるべき業縁の催せば如何なる振舞もすべしとこそ聖人は仰せそうらいしに当時は後世者ぶりして善からん者ばかり念仏申すべきように思い、或は道場に張文をして「何々のことしたらん者をば道場へ入るべからず」なんどいふこと偏に賢善精進の相を外に示して、内には虚仮を懐けるものか。願にほこりて作らん罪も宿業の催す故なり。さればよきことも、あしきことも業報にさしまかせて、ひとえに本願をたのみまいらすればこそ他力にてはそうらえ。

聖人が、薬あればとて毒を好むべからず、と仰せられたは、薬があるゆえに毒を好んでもよろしいというて邪見に陥ることを戒められたもので、少しでも毒を食うたものに薬を吞ませぬということではない、毒もない、病氣もないも

のでなければ薬を飲んでならぬというならば、我等は病氣がなおり様はないではないか。如何とも手をつけ様もないかかる重病人も、この本願の妙薬をいただいてこそ、その慈悲にほだされて本復するのではないか。かく言えば定めて毒を好んだり、病氣になつたりするであろうという懸念があるかもしれぬが、決してさる心配は無用の極にて、誰か好んで病氣になるものか。よしんば御医者にあまえ、薬にほだされて、毒を好むというならば、それも略意病氣の所為といわねばならぬ。胃病患者がいかにとめられても菓子を食べたい、飲酒家が一刻も飲まずには居られぬというのが既に中毒をして居るからである。願にほこりて作らん罪も宿業の催す故なり。じやから仕方がない、病氣じやから仕方がない、中毒じやから仕方がないというて、菓子を食ひ、酒を飲んでも勝手次第であるという邪見に陥りてはならぬが、さればとて少しでも菓子を食ひたい、酒飲みたいと思ふこともいかに、厳格なる戒律主義、律法主義を勵行してでなければ、この妙薬を用いてはならぬというならば、薬を用いる時がなく、病氣のなおり様はないで







親の心である。ただかく言うてくれたところが、それが真実でなければ決して安心出来るものではない。真実の教が現代に徹底しないのは、かく説くも、たとなつて居るからである。

真にかくしてくるが親である。かくすかし慰めて呉れる親が事実であるゆえに泣く児も自然に慰められるのである。今我等も泣きことを止めよ、止めねばならぬという持戒持律では泣きは止まぬのである。何処までも泣きを慰めてくれるゆえに安心が出来るのである。不断煩惱得涅槃の味はここである。煩惱が断ぜられぬといふことを仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せ下されたものゆえにそこまで見て下さるか、同情して下さるかという様に心の底まで仏の御心が届いて下されたところで初めて安心が出来るのである。是がかゝるあさましき身も本願にあいたてまつりこそ、げにほこられそうらえという味である。是が得涅槃の味である。勿論この世では涅槃は得られぬゆえに、得涅槃分というてある。涅槃は来世に得るとしても、来世にて涅槃を得られるだけ、流転生死の根ぎれが出来たのである。この点を横超断四流おうちょうだんしりゅうというのである。この不断煩惱と断四流との関係が頗る注意すべき点である。

私なども、時としては言葉の言い廻しによりて、煩惱を

うような教ならば、宗風とまではならぬのである。所謂真宗以外の宗旨が持戒持律が本義なれども、ほとんど事実において破戒無戒でありながら、併し真宗の立場となることが出来ぬのである。何となれば根本主義が持戒持律で立つてあるのであるから、畢竟これを守らぬというが放縦主義に陥つて居るといふことに過ぎぬのであるから、それでは安心の出来る筈はない。昨今の他宗の有様ならば真宗と選ぶ事はないのではないかと人があるが、決して破戒無戒が真宗であるという事ではない。その代りに真宗の人も破戒無戒を特権であるかの如く考えて放縦に陥るならばこそ真に他宗とえらぶことはないのである。親鸞聖人の時代的研究をする人が砂石集など引きて当時の破戒無戒を立証して、聖人は時代の産物であるかの如く論じて、これを誇りとする人も、弁護する人も片腹痛いことである。

然らば如何なる点がこの宗風の淵源かと言へば、聖人の眼中には持戒持律が本義でない、破戒無戒が本義ではない持戒持律は煩惱具足の我等には出来得ないのである。聖人が化身土巻けしんどまきに末法灯明記まっぽうとうめいきを引き給うたが是である。末世において真に持戒の人ありと言わば、是れ市に虎あらんが如しである。全体持戒持律が出来ると思つて居るが大なる間違ひである。ここに如来の選択本願せんじやくほんがんは、末法の世に持戒持

断ぜられぬことを知らしめして下さる御慈悲をただけは安心が出来るのであるといふことを、動もすれば、煩惱が止むのである、というた様に聞きとられることがある。泣くな泣くなという間は止まぬが、その止まぬころを察して呉れる親の前に泣きが止むのであるといふならば、明らかに煩惱が止む様に感ぜられる。これが大なる誤解の本となる。子供の泣きの心底まで和やわらげられたゆえ、子供が安心するのである。その結果泣きも一時は止むであろうが、又泣き出すこともあろう。どれだけ泣き出してもなだめてくれる親あればこそ、たとい如何に泣こうが、親がなだめてくれるといふが親心である。本願の不思議である。その親心をいただいて安心して、泣くも泣かぬも氣にならぬ様になつたが得涅槃である。得涅槃というは煩惱が氣にならぬようになつた心持である。さればこそ、海河に網をひき、釣りをして世をわたるものも、野やまに猪を狩り、鳥をとりていのちをつぐともがらも、あきないをもし、田畑をつくりてすぐるひともたたおなじことなり。さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべしてこそ聖人が仰せられた次第である。浄土真宗の在俗在家の有様にまかせて、持戒持律の律法主義を全く解脱してあるは此が根本である。

持戒持律なれば結構なれど、破戒無戒でもよろしいとい

律の成すべからざるを憫あはれみたまいて、願を起したまふ本意ひとえに破戒無戒の者の為である。この選択本願が本義である。

しかるに持戒持律を以て本義とする聖道門は不可能である。不可能であるから破戒無戒を本義とするといふ放縦主義では成り立たない。

その破戒無戒をかねてしろしめして、そのものをたすけんがための五却思惟の本願である、永却の修行である。如何に我より隔てるも、そのものを隔てぬといふ、無限の大悲の淵源なくんば安んずることは出来ぬのである。

超世無上に撰取し選択五却思惟して

光明寿命の誓願を大悲の本としたまえりその無限大悲の親様が尽十方無碍光仏である。そのお慈悲の塊が如来様である。御慈悲の塊が浄土である、報仏報土といふことは、衆生を憐みたまふ大悲の誓願に酬報して、慈悲の塊としてあらわれ給ひし如来である。浄土である。尽十方無碍光仏といひ、無量光明土といふも畢竟大悲の塊である。

私が「信仰の余歴よれき」に仏は慈悲の塊であるといふたのはいかな私の苦しい心の煩悶も、飽くまで和らげて下さつた慈悲の塊である。口熱を飽くまで取りて下さる砂糖の塊が氷砂糖である如くである。



しかるに若し極楽はたのしむとききて参りたいという、結果めがけての信心なれば、たとひ未来々々というても畢竟現世祈りと同じく罪福信する行者である。

冥想的に仏を憧憬したり、法悦的の歡喜を予想したりするの、心を清め、行を正しうして、理想的生活を實行せんとしてあせるのも、畢竟定散自力の信心である。これ解慢界に墮するものである。如来の光明に接触せざる含華末出の信心である。仏智不思議に夜が明けぬのである。これが即ち如来の智慧海の不思議に帰入せぬのである。この無限大悲の如来の光明に接触せずして、冥想的に理想的に憧憬するものは皆定散心である。律法主義である。これが化身土巻に出てある機類である。邪定聚及び不定聚は「彼の因を建立したまえる事を了知すること能わざるが故に」である。破戒無戒、罪惡深重のものをたすけんがために建立したまいたるが選択本願である。持戒持律のなし得ざることを憐みたまうが大悲の源である。

真宗紹隆の太祖聖人特に宗の淵源を尽し、教の理致をきわめて之を述べたまうたというがこの点である。しかるに親鸞鸞人たちどころに他力撰生の旨趣を受得し、あくまで凡夫直入の真心を決定したまうたとあるが、実にこの彼の因を建立したまひし仏智不思議を了知せられたのである。この他力撰生の旨趣というのが歎異鈔に所謂本願他力の意

せられたがこれである。愚秀親鸞と仰せられたがこれである。愧ずべし、傷むべしと仰せられたがこれである。機の深信が起るのである。罪惡感が起るのである。ここが、かかる浅ましき身である、この不断煩惱たる浅間しき身をしるしめて下さるが一向専修、選択本願の大道である。さればこそ諸の善本を撰し諸の徳本を具して極速円満して下さる、真如一実の功徳の大宝海の南無阿弥陀仏である。

本願力にあいぬればむなくすくる人ぞなき

功徳の宝海みち／＼煩惱の濁水へだてなしかかる浅ましき身も、本願にあいたてまつりてこそ、げにほこられそうらえ、これが得涅槃である。

愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、さらに往生すまじや否やの心配がないのである。気がかりがないのである。愛欲も名利もみな煩惱なり、されば機のあつかいは雑修なりと仰せられたが、実に煩惱の永解けて功徳の水となる本願円頓一乗の味である。

この如く、持戒持律の律法主義でもなく、破戒無戒の放縱主義にも非ずして、選択本願の罪惡救済の絶対第一義乘によりてたすけられるのである。

私が律法主義でもない、改縦主義でもないという言を繰り返すものであるゆえに、或人が然らば如何にせよと言わ

趣である。「世の人つねにおもえらく、悪人なお往生すいかにいわんや善人をやと、この条一旦そのいわれあるに似たれども本願他力の意趣にそむけり。煩惱具足の我等は何れの行にても生死をはなる事ある可からざるをあわれみたまいて、願を起したまう本意、悪人成仏のため」である。この他力撰生の旨趣を受得して、その他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因である。

しかるに、その他力不思議をただかずして、なお持戒持律を以て進まんとする者は疑心の善人である。これを化身土巻に誡められるのである。故に化身土巻に末法灯明記を引き、末世に於いて持戒持律にて出来得ざることを、仏かねてしろしめして、市に虎あらんが如しと仰せられたのである。

破戒無戒でよしと放縱に流れて、自分の気まかせにするというのではない。我等が持戒持律の出来得ざる事をしろしめし下されたが「五劫思惟の願は親鸞一人がためなりけり」と「仏かねてしろしめし」下さる如来の本願に随順するのである。信順するのである。相応するのである。

それ故、我こそと大びらきつて破戒無戒にするのではない。破戒無戒の悪人なり、煩惱具足の凡夫なり、不断煩惱のとも隔てのやまぬものであると、廻心懺悔が出来るのである。そくばくの業をもちける身にありけり、と仰

るのか、甚だ困りましたと述懐せられたのを聞きて、如何にも悪るかつたと大にその人に同情したことであつた。全体これでもない、彼でもない。彼もいかぬ是もいかぬという言葉使いが宜しくない、遠慮していかぬ、横着でいかぬと言うならば一体どうしたらばよいのか分からぬ。いかぬ、／＼と言わると一種の律法主義に聞きとれる。信仰を得ねばならぬ、徹底せねばならぬという、是も律法主義に聞える。物を取ろうとすれば横着じやと叱り、控うれば遠慮じやという。一体どうしたらばよいか分からぬ。横着するな、遠慮をするな、という言葉を繰り返すばかりでは横着も遠慮も止まぬ。

○その場合、こちらの態度を云々する代りに、早くその物を与えて呉れた精神、馳走をしてくれた本意を明らかにするに如くはない。

汝が空腹なるを察して、汝に満腹せしめんために与えたのである。汝が嗜好を察して、最も適當なる品物を与えたのであると言われたるとき、その深き親切、念を入れたる品物たることを頂きたるときは、如何に沢山に貰いたりとて敢て横着という訳もなく、如何に少ししか食する事が出来ずとも、十二分に御親切に満足したのである。敢て遠慮でもないのである。この深き御真実が選択本願である。本願真実である。遠慮するなと言わずとも、遠慮がとれるので



ある。横着心も自ら心を廻して深き御心を頂くのである。今も、持戒持律でなくてはならぬという様な遠慮はどうしてとれるかと言えは、「さるべき業縁の催せば如何なる振舞もすべし」とまで、察して下された御真実でとれるのである。「かかるとあさましき身も本願にあいたてまつりてこそ、げにほこられ候え」とは遠慮のとれたありさまである。かく遠慮がとれたらば定めて横着になるかと言えは、決して左様ではない。「さればとて身にそなえざらん悪業はよもつぐられ候わじものを」である。その代りにたとい悪業を作らぬから、我こそ善人なりと思うならば、それこそ大間違である。罪悪を自覚せざる疑心の善人である。我こそ持律が出来る様な顔をして、何々のことしたらんものは、道場へ入るべからずなどというのは、外に賢善精進の相を現して、内には虚仮不実を懐ける雑善主義である。雑善主義である、偽善主義である。

聖人が善導大師の至誠心積に訓点を施して、「外に賢善精進の相を現することを得ざれ、内に虚仮を懐けばなり」と仰せられたが実に如来利他真実の絶対救済の第一義を示されたのである。

### 歎異の御涙と

#### 近角先生の御教化

歎異抄の末文に

「悲しきかなや幸に念仏しながら直に報土に生ぜずして辺地に宿をとらんこと、一室の行者の中に信心異ることなからんために、泣く／＼筆を染めてこれをしるす」とあります、是は誰に向つての言葉でありますか。

「幸に念仏しながら」と云うのでありますから、幸に会い難き仏教に遇うて、口に念仏を称える者であります。然るに「直に報土に生れずして辺地に宿をとる」とはどういうことでありましょうか。口では念仏を唱え、心では、「大悲」と思うても、それは思想の上で、大悲を理解し、観念の中で親の形を認識してないのであつて、すつぽりと大悲のみ胸に抱かれていのではないのであります。それでは、信心に似て非なるもので、まことに悲しい事でありませう云う悲しい間違いの無いために泣く／＼聖人の直々の仰せを書きつけて置くと、唯円大徳は申さるのであります。

生極楽」の信仰的家庭を実現せられたる淵源である。雑行をすてねばならぬとか、たのまねばならぬとか言えは、これが兎角律法主義に聞こえて間違ひ易いのである。本願不思議の大慈大悲をいただけば、おのずから賢善精進の雑行雑善を廻えすのである。内懐虚仮の愛欲名利を慚愧して、而も機のおつかいがないのである。実に「善もほしからず、また悪もおそれなし」と仰せられたが実に聖人御自督の極である。

歌集「還相」より 筑紫野春草

招喚の声の外には道なしと「蓮院の言のよろしき音もなく流れ去りゆき還るなし見つさびしも川といふもの

鐘銘

招喚の大悲のみ名の南無阿弥陀高くひびけと撞くやこの鐘朝夕につくやこの鐘諸人のこもる思ひの永遠にひびけと

松村繁雄

私はこの涙のお言葉を承るにつけ、近角常観先生の檜崎村の御教化を思い起し

善知識に遇うことも教ゆることもまた難しよく聞くことも難ければ信ずることも猶難しと仰せらるる中に、善き師に遇いまつるを得し身の幸慶を思い、「たま／＼行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」との御教がしみ／＼胸にこたえるのであります。

或る夏（四十年前も前、私の二十四、五才の頃）近角先生が、わが山口県の檜崎村に御来化下さいまして、御宿舎、松本匡一氏の宅に於いて、御示談下さつたのであります。その時、後に武蔵野学院の院長をされました徳田潔先生（今は故人）が、先生のお側近く着席せられて、団扇を持つて盛んに風を送りながら全身を耳にして御示談に聞き入つておられました。

徳田先生という方は、その頃は小学校の校長さんで、まことに謹厳な、そうして熱心な求道者で、それまでにも、



度々近角先生の御教化を蒙られて、既に念仏していられた方でありました。

ところが、近角先生の言々火と燃える御示談がだん／＼と進むにつれて、

「お慈悲というものは、聞いた、分つた、信じた、というてよろこぶようなものではない。久遠劫来迷ひ続けて淨かぶ瀬のない、石ころのようなこのわたしを、仏様の方から『見捨てはせぬぞ』とお呼び下さる御真実である」

との胸に迫るお話の弾みに、ふと側の徳田先生を振り返られて

「徳田君などお慈悲はとんと逃がしている」と、計らずも指摘し給うたのであります。

この意外の一撃に遇われた徳田先生は、驚愕、且つ狼狽手に持った団扇も取り落とされて、それまでの法悦はどこへやら、深い煩悶に陥ち入られて、それが御縁になつて、後には立派な他力信仰の人となられたのであります。このことは、先生御自身の生々しい御告白となつて、数多の有縁の人々に尊き御教化を垂れ給うたのであります。私もその一人でありまして或日、私は、自分のよろこびを手紙に認め

「斯う聞いて、こう信じて、こう喜んで居ります」と長々と書き綴つて、武蔵野学院の先生へ差し上げたので

聞くことがすべて死んだ言葉、概念になつて、生きたお慈悲をその型にはめて、みな殺して了うことになりませぬ。

『引きやぶり／＼、引きやぶつたという心も、引きやぶり』然し、その引き破るということが、実は大変むづかしいことでありまして、自分で引き破つても、又引き破つたという我になりますから、他から引き破つて貰わねばなりません。

私もかつて檜崎村で近角先生からひどく引き破られまして、自分の我に、とんと突き当り、その時は、ハッと致しました。私の我は鋼鉄ばりですから、チョットはたります。すぐ修繕にかゝりました。『ナニ、自分は分つてゐる、頂いている。自分の信心は金剛堅固だ、先生は私の心を御諒解ないのだ』と頑張つておりました。然し何んとなく氣にかゝる不安な心がどこかに潜んでおりましたが、その後はじめて氣付かせて貰つて見れば『ナル程、思召はソツチノケにして、頂いているとか、よろこべるからとかいうことに氣をとられ、お慈悲は飛んで逃げていた』と分つて、それ以来、その大斧鉞が、今に生き／＼として、常に私の態度を引き破つていただいで居ります。

ホシに、何時もお慈悲をハネのけて『如来の御恩といふことをば沙汰なくして、我も人もよしあしといふことをのみ申し合えり』です。今も矢張りそれなのです。……今迄の

あります。それは「結構じや、それでよいのじや」と、お誉めを頂きたい下心からでありましたが、数日たつていただいた御返事は、お誉めのお言葉ではなくて、大要次のような御教化でありました。

「お手紙拝見しました。仰言ふことは、一一御尤もです。然し何んとなく物足らぬ心地がして、どこが物足らぬのかその点を捕捉するために、幾度も／＼繰り返して読みました。只今フト目が覚めて、其点に気がつきましたから忘れぬうちに急いで書きます。」

「それは、アナタの態度がいけないのでした。もう私は頂いてゐる、分つてゐる、救われている、という風で、それが『我』になつてゐるのです。そう申すと、あなたはキツト、そういうどこまでも我の私をお見捨て下さらぬお慈悲です、と自ら云うて思うて仕舞われるでしょうが、それがいけないのです。心得たと思うは心得ぬなり、とのお言葉の意味が、只今ほど私にハッキリした事はありません。これはアナタによつて知らせて頂いたことを感謝します。とかく信者というものが、否私が、自分は分つてゐるといふ態度で聞くものですから、折角聞いても『ウン、ソウジヤ、ソレモソウジヤ』と云う風になつて、丁度、ユツプに

冷たい茶が一杯はいつてゐると、新しい茶が入らぬように、

聞いて覚えてゐることを捨てて、否、捨てはせられまいがサシオイテ、何時も、今始めて、と云う聞き方が大事です。ね。お慈悲を聞くのです。……」

あれから四十年、近角先生もお浄土に還り給ひ、徳田先生も今はここにはおわしまさぬけれども、この御教化は、年月の経つにつれて、益々私の胸に生きて下され、又して／＼「聞いてゐる、分つてゐる、信じてゐる」と、自性唯心に沈む私の心を引き破つて下され、直に弥陀の浄土へ向かわして下さいます。

思えば、海千山千、浮世の波風をうけて、既に老境に入り、いよ／＼老獪になつて、ひと理屈は云う私でありますけれど、省みて胸にこたえるものは

悪性更にやめがたし心は蛇蝎の如くなり  
修善も雑毒なるゆゑに虚仮の行とぞなづけたる  
のお言葉でしかありません。

それにわが命は、ジリ／＼と燃えて細るロウソクのように、一刻々々消滅して明日をも期せられない。

コチ／＼と刻む時計の音に聞く  
おのがいのちの縮む速さを  
夕顔は真白に咲けど又一日  
消えし命をどうしようもなし



どうしようもないということは、何物をもつてしても粉らわす方法のない悲しみであります。そこに私の永却の地獄があります。

然るに「別解、別行、悪見の人々と妄りに見解を説いて互に惑乱し、自ら罪を造りて退失し」、又しても、又しても、辺地に宿をとろうとする私であります。その私に、このお教化は、いん／＼と梵鐘のように響いて下さいます。

おしえおきて入りにし月のなかりせば  
いかでこころを西にかけまし

### 近角常観先生と嘉村文学

鎌倉仏教の一特質が法然上人から親鸞聖人へと流れまして、内省的な「機きの深信しんじん」を人間観の根本にしましたことは、もはや贅言を要しません。そしてそれは善導大師の教学のおよぼせるところであることは法然上人御自身で、お述べになつておられるところであります。

ところで、この「機」あるいは機根・人間性、或は西洋的な意

鑑三先生の憶い出」等によりまして、氏が如何に内村先生の人間から影響を受けたかを知ることが出来るのでありますが、磯多の場合には、近角先生の影響などというよりも「感化」がハッキリと作品の文脈、——いや、彼の人間形成の基盤きばんをなしているときえ申せるのであります。

嘉村の文学はいわゆる「私小説」という分野に属しており「自分の私生活を描く、自分の非行をぶちまける、自分という一個の存在をかけた、人生を把握しようとする冷徹な酸厳さをもつ」そういう作風でありまして、それに特に小説のもつ「筋らしい筋や事件らしい事件」を扱わぬのに、読者の心を掴み、いやおうなしに首肯させ、同意せしめて了うような不可抗的な魅力にささえられていた作なのであります。

これは彼が三十三歳、昭和三年頃に最初に発表しました作品、「業苦」と、同じく七月に発表しました「崖の下」という彼の作品にハッキリ見られるところであります。

彼は後に「途上」(昭和七年中央公論発表)や、亡くなる年の昭和八年一月に「神前結婚」という作品を改造に発表しています。彼が作家として有名になつて来るにつけ、近角先生から遠ざかり、作品には、彼独特の「えぐるような反省と、自己分析」が薄くなつていく、……いや宗教性が影をひそめてしまつておるのであります。

皮肉な言葉で云うと「彼は作家として、職業人として、有名になつて来たが、反対に深い純粋性と、宗教的な、真宗的な思想性

この善き人の歎異の御涙に誘われ、迎えられて、西に心をかけさせて頂く身の仕合せを思うとき、地上の風雨何ぞものかは、煩惱の闇何ぞものかは、

無明長夜の灯炬なり智眼くらしと悲しむな  
生死大海の舟筏なり罪障重しと歎かざれ  
のお言葉に励まされるばかりであります。

### 石原宥政

味での自我……いろいろに解することも出来るでしょうが、近角常観先生に常随したり、日曜講話等に出て、その影響をハッキリと受けました「嘉村磯多」につきましても、彼の人間観と作品の根底にあるものは「機きの深信」によるものであることは、あまりにも歴然としておるのであります。

そのことは、志賀直哉先生の「和解」や「大津順吉」や「内村

を喪つてしまつた」とも言ひ得るのです。

磯多は近角先生の「気骨と個性と迫力」にあふれた文章に惹かれ、その影響を作品のいたるところに現わしております。嘉村磯多・人と作品』の著者である太田静一氏は、磯多の生家、山口県吉敷郡仁保村大字上郷を实地踏査して、その土蔵の中から、近角先生主宰の『求道』誌を見つけ出されましたが、それには、丁寧な朱註や、傍線点線、書き込みがあつて、一言一句を文字通り味読したあとがうかがえたとのことでありました。ゆうに二十回近く読んだらしいとのこと、「なるほどそうか」と私は、磯多の文脈の底にある、そしてその背骨のようなものに触れた思いがいたしました。

さて解説や説明はこのへんにおいて、彼の香りの高い作品について触れてゆきましょう。

嘉村氏の最初の傑作「業苦」を読みますと、彼がなぜ女学校の教師をしていた千登世と、妻も子もある身でありながら、東京へ駆落して来なければならなかつたか。その原因については、自分からさえ気乗りして結婚した一歳上の妻が、処女ではなかつたということ、しかも、中学時代に二級うえた嫌いなカギ鼻の山本という男とその妻とはながい間、醜関係をもつていたというのです。そこに妻を信じていた彼は大きな、やりばのないシヨツクを受けたのでした。

「圭一郎は中学三年の時、柔道の選手であることから、二級上の同じく選手である山本という男を知つた。眼のつった、唇の厚



い、鉤鼻の山本を圭一郎は本能的に厭がった。上級対下級の試合の折、彼は山本を見事投げつけて以来、山本はそれをひどく根にもつていた。……その山本と咲子は二年間も醜関係があつたというのを菩提寺の若い和尚から聞かされた。憤りも、恨みも、口惜しさも通り越して、圭一郎は運命の悪戯に呆れ返つた。しかもこの結婚は父母が勧めたというよりも自分の方がむしろ強請んだ形にも發らなかつたので、誰にぶつかつて行く術もなく、自分が自分の手負いでよろけなければならなかつた。

と書いておきます。そして彼はたま／＼勤めの都合上、下宿していた家で、同じく下宿人の女学校の教師であつた、処女の千登世と結ばれ、東京へ逃避することになるのです。しかし、かねてから上京して師事していた近角師に常随してその教化を蒙つていた關係上、上京すると何よりも先に師に身を寄せて一切をぶちまけなければ措けない心の立場にあつたのだ。師は人間的な同情は十分持ちながらも、しかし、師自身の信仰の上から圭一郎の行為を是認して見遁すことは許されなかつた。師は毎夜のように圭一郎を呼び寄せて、

「無明煩惱しげくして、……妄想顛想のなせるなり……今は水の出端で思慮分別に事缺くけれども、すぐに迷いの目がさめるぞ斯うした不自然な同棲生活の終に成り立たざること、心の負担に堪えざること、幻滅の日、破滅の日は決してそう遠くはないぞ。一旦の妄念を捨てて別れなければならぬ。……」

斯う諄々と説法した。圭一郎は生木を裂かれるような反感を覚え

ようにわざと、口笛で拍手を合せて、足で音頭をとつていた。が何時しか眼を瞑つてしまつた。

「愛慾之中……窃々冥々、別離久長」、かつて学舎で師に教わつて、切れ／＼に譜んじている経文が聞えると、心の騒擾はいよ／＼増した。

「顛倒上下……法相顧恋、窮日卒歳、……愚惑所覆」……暫らくすると、圭一郎は被念の袷に顔を埋め、両方の拳をユメカミにあて、お勝手に朝餉の支度をしている千登世に聞えぬよう声を噛みしめてしくり／＼哭いていた。

とあるのです。申すまでもありませんが、大經の五つの悪相の障りを説く文言ほど、私達に、切実にひびくものはありません。それは善導大師の著述よりも更に、単刀直入に、迫真の力をもつて、人間性の邪悪な面と、倫理、或は仏教生活の優位真実なことを論証顯示してあるのです。

古来、四十八願とともに、大無量壽經のこの聖言は、それを読む真摯な人々に非常な感動を与えたことでしょう。そして嘉村磯多がこの人間分析の文言に慟哭したことは、けだし当然であつたらうと思われのです。

磯多は本妻と離婚しましたが、彼の死後、後妻も、更に別の愛人を求めたとか、一時、行方がわからなかつたとの由。

それはさておき、不世出の仏教者、近角先生が、特異な作風をもつ嘉村磯多氏とこのような御縁をもつたというところに、私達は仏陀の教を觀たいのであります。

ながらも、しかし故郷の肉親に対する断ち難き受執は感じているのだから、その虚を衝かれた日には良心的に實際適わぬ感じのものだつた。圭一郎が師から、兎や斯うきつい説法を喰つている間、千登世は二階で一人でわびしく圭一郎の帰りを待ちながら、人通りの杜絶えた路地に彼の下駄の音を今か／＼と耳を澄ましている時……」

と書いています。不世出の仏教者としての近角先生のしつかりした態度は、私自身も袷を正される思いで共感を覚えます。全く恋というものは、屢々人に正理の眼を喪わせてしまうことは私自身、身に沁みて感じておるのであります。

さて磯多は、師の眼をのがれようとして「崖の下」の家へ移るのですが、皮肉にも新しく移つた家の崖の上には、師の「会堂の尖塔」が見え、学舎に寄宿している学生の「勤行の声」が聞こえて来るのでした。

私は、この作品をたよりに地理を調べるために、昨年現場へ行つて見ましたが、先生の求道会館は丁度高台といつたところの丘の上であり、今は人家が建てこんでおるが、昔は相當に景色のよいところであつたらうと推察されました。その丘の下、つまり、「崖の下」に、磯多と愛人の借りた家があつたのでした。私はなるほどとおもひ、一層、彼の作品の眞実性に触れたのでした。そしてこの家から磯多は、

「鎮つた朝の空気をとよもして、手に取るように意地悪く聞えて来る。彼は忌々しさに舌打し、自棄蕪な捨鉢の氣持で、空嘯く

法信鈔

高松作一

拜啓。……近角先生の宿業論、繰り返し拜読させていただきました。……慈母の愛子にさす如く、有難い極みでございます。

今日まで、K先生、Y先生方の御教化にも逢わせて頂きまして、私は、

「一切は如来の御計らしい内に住ませて頂いて居るのだ如来はこの愚かな、罪悪深重の私を、如来の御国へ引き入れてんがために、ありとあらゆる方便を以て働いて下さるのだ。自分では過失だ、失敗だと思ふことも、如来様の御方便のお手段だ。如来は衆生の為には、人の鬼魅につかれて狂乱して所為多きが如し、とあれば、唯々毎日の一切の生活そのまま全部如来御方便の外はない。」

と言う氣持で御仏に感謝したのであります。然しその氣持の中には、自分の宿業と言う恐ろしい悪業には氣がつかず、何事も一切如来の御計らいたという風で、慚愧心にとぼしかつた次第であります。

ところが、近角先生の導きで、歎異鈔十三章のおこころを知らして頂きまして、私の身口意の三業は一切が悪業であり、この悪業の束縛から逃れ出ることの出来ない私の為の為に御本願を起して下されたと、只々頭が下るばかりでございます。近角先生の御心は、永くこの土に止まつて、愚かなる私を導いて下さいませ、御札の言葉もありません。

敬具



心と真実

佐藤 強三郎

才五 白米 貳俵

善兵衛が帰つた晩、捨吉は又訪ねた。信哉は早速「捨吉さん、この間あなたは自分の心が言うことをきいてくれません」といつたが、あなたは、その云うことをきかぬ心を相手に一生を送るのでしょうか。一体いつになつたら、その心があなたの云うことをきく様になるでしょうか」と問えば、捨吉は

「今までやつても駄目だつたのですから、今後いつまでも駄目でしょう」  
そこで信哉は、

「あなたは、自分だけを見ているのです。自分の心だけで考えているのです。  
もし他から、他からですよ、  
そのあなたの浅ましい心を見て、それが止まぬのを気の毒に思ひ、あなたの胸の中にあるどんな苦しみを察して、それに同情し、呆れなかつたら、どうしますか。  
相手は善兵衛さんではなく、  
他から、あなたの感謝し得ない心根を察し、そう思うのも無理もない。出来ないのも、もつともである、人間はそんな境遇にな

ればそうなるものだ。こちらが悪く思わぬ。わしに感謝はいらぬ、どこまでも呆れるものでない、という親切を聞いたらどうしますか」  
と話をすすめた。すると、捨吉は  
「その様に察して、どこまでも呆れて下さらなければ、善兵衛さんにどう思われてもかまいません。私が悪いのですから。あなたがたい話です」  
とよるこんだ。捨吉が先に縄を放した様である。  
その翌日捨吉は一番上等の白米貳俵を猫車に積んで善兵衛をおとすれた。あの時以来、正に九年目である。

「昔、御見舞下された御礼に遅くなつて恥かしいのですが、今日御礼に参りました。これをどうぞ……」  
と云つて出した。善兵衛は眼を白、黒させて驚いた。どう言つてよいか返事も出来ぬ。やがて、  
「さあ、お上りなさい」  
と云うばかり、  
「今日は是非上げさせて下さい」  
と捨吉はいう。困拮裏をかこんで、お茶を飲んでいるが、まるで二人は真剣勝負である。しばらくして捨吉が

「長い間失礼いたしました」

と丁寧な頭を下げれば、  
「いや、どうしまして」と善兵衛はどきまぎして返事はしたが、気が案でない。

「これは、一体どうしたのです」とけげんな顔人きである。捨吉は、

「私が悪う御座いました」と答えた。そして帰ろうと、お辞儀をしかけるのを見て、

「まあ、良いでしょう。ゆつくりどうぞ」と留めたが、捨吉は「私の気持はこれで済みましたから帰させて貰います」といつて帰つてしまつた。

四、五日後に善兵衛は医者への帰りにまた同じ道で捨吉に会つた。すると捨吉はさきに

「やあ、今日は」と立派に挨拶した。また後手になつてしまつた。

その晩善兵衛は信哉を訪れ、  
「捨吉さんが変りました。途中で会つても立派に挨拶をするようになりました」とて、ありのままを詳しく話した。すると、

「捨吉さんも偽物なりという正札を下げて歩かれる様になつたか」とつぶやいた。善兵衛はます／＼わけがわからぬ。捨吉に負けてはならぬと気が気でない。

善兵衛の分家の件が本家をたすねて、

「先日区長の家で、表彰が良いとか、悪いとか、恥しいとか話が出たので、区長が心配して、まだ発表しないうちに取り下げの気になり、その様に手配をしないと村長が迷惑するからどちらかに定めてくれと相談に来た。どうすればよいのだ。私は前に表彰してくれる様にと運動して置いたのだ。表彰して貰つた方がよいぜ。今断ると今後駄目になるからなあ」  
「そうだなあ、断らんで置いてくれ」と善兵衛が答えれば、  
「私もそう思う、そうしないと新聞にも出ないから」と云つて、分家の件は安心して帰つた。

捨吉は、夜になると、「客人は居ますか」と遊びに来る。これは里芋の着付ですがといつて小さい皿を出す。それを食べながら二人で話す。捨吉は、  
「悪い者をどこまでも呆れないなどという話は、いつから始つたのですか。実は私も善くなるう、善くなるうと、夜も日も勉めて来ましたがなれなかつた」  
と言えば、信哉は、

「この話は今始つた事でないのです。私共は本当の親切を自分でやつて見ると我を張つていのです。その我慢で苦しむのです」  
と話してくれた。捨吉は、

「私はほんとうに我慢でした。この我慢な私を、どこまでも見捨てないとは、ありがたいことです」と言つた。



捨吉は十日間も来なかつた、ある日来て信哉に問うには  
 「私が客人から聞いた話より、もつと〱難<sup>も</sup>じい、深い話が沢  
 山あるのでないですか。あつたら聞かせて下さい。他家へ行つ  
 たら、何だかこみ入つた、有難そうな話をやつていました。ま  
 だあるのだと人が言つていました。何にせよ、私は学校もろく  
 に行かぬ無学者ですから、恥かしい。」  
 と歎いた。信哉は、改まつて、おごそかに、

「自分のような、いつまでも〱我慢のやまぬ悪い者を可哀想  
 におもい、それを何処までも呆れない御親切を聞いて有難いと  
 思う外に何もありません」  
 と云えば、捨吉は、

「ホントに、それきりですか」と重ねて尋ねた。すると信哉  
 は、どこまでも真面目に、

「私は、ホントにそれだけです。一生滯<sup>ひ</sup>いただけでも尽きるも  
 のではありません」と答えた。

「そうですか、それは有難い。それで助かつた。六ヶ敷いこと  
 を知らんでもよいのですね、あゝ、榮々した」

といかにも氣樂そうに感嘆した。捨吉は、

「その大事な所を一つ書いて下さいませんか」と頼めば

「じぶんのような、いつまでも〱がまんをやまぬ、わるいも  
 のを、かわいそうにおもい、それをどこまでも、あきれないおじ

ひをきいて、ありがたいとおもうほかに、なにもありません。

しんやはいしや」

「これでどうですか」と墨で紙に書いて渡した。それを捨吉は  
 ゆつくり読んで、これなら仮名だから有難いとよろこんだ。そし  
 て、「しんや」とあるのを見て、客人の名前は「しんや」です  
 ときいた。信哉はうなずいた。

捨吉は其後も度々善兵衛に道で会うが、その度に、「ヤア今日  
 は」と止まつて堂々と挨拶する。又書いて貰つたものを、毎日の  
 様に読んで居るので、しまいには暗記して、いつでもすらすらと  
 そらで言われるようになった。そして、それを出してはよろこん  
 で見た。

そして色々の事を思うのであつた。

……自分の様な貧乏人をどこ〱までも呆れないという御親切を  
 きいて見れば、貧乏をはずかしがる事もいらぬわけだ。学問のな  
 いのを呆れないというのを聞けば、無学を苦にしなくともよいわ  
 けだ。悪いものを見捨てず、隔てぬとならば、身分の高い善人をう  
 らやむ事もいらぬわけだ。人をおそれる事もいらぬわけだ……。

ある休みの日、捨吉は朝から信哉の所で遊んでいた。役場の用  
 事で、村長が区長の家を訪ねて来た。その日善兵衛も朝から来て  
 いたのだが、一通り用がすんだので、区長は、皆を案内して信哉

の室へ這入<sup>はい</sup>つて来た。区長が夫々紹介して居る所へ分家の伴も中  
 途から座についた。皆で寺の和尚が蜜柑の試植をやつて成績がよ  
 いとか、しばらく四方山の話をしているとき、客人は例の伴さん  
 とか、捨吉さんとか、度々引合ひに出した。捨吉はその様子を  
 見た。客人はだれに対しても丁寧で、村長も金持も、区長も、貧  
 乏人も、年寄りも若い者も、公平に見て隔てがない様である。し  
 ばらくして、別にむつかしい話もなく、一人二人とばらばらに帰途  
 についた。これ等の様子を見て捨吉はいよ〱氣丈夫になつた。

翌朝、善兵衛は又捨吉を訪ねて、  
 「昨日の紙を見せてくれ、あれを写したいから」という。  
 是を写し取つてから、

「このがまんと書いてあるのはどういふことか」ときいた。捨  
 吉は考えていたが

「本当の親切を自分がやつて見せると我を張ることだ、とよ。  
 それは信哉さんによく聞いた方がよいぞ」  
 と云つた。

捨吉は、近頃不幸な人を見れば、氣持ちよく、或は米を持ち、  
 或は野菜を持つて見舞に行ける様になつた。そして時々、金持の  
 善兵衛の家へさえも、この粟を食べてくれ、この黍<sup>きび</sup>団子も、と言  
 つて持つて行つた。

信哉は今度は遠くへ行つて、当分は来ないだろうという話であ  
 る。

その後善兵衛は善行者として村から表彰され、予期したように  
 新聞に大きく出た。善兵衛は、村を始め、分家からも盛大に祝宴を  
 開いて貰つた。自宅の内祝を大々的にやつたのは勿論である。村  
 長以下百人も来た程だ。捨吉も末席に居た。酒宴は二日も三日も  
 続いた。

善兵衛は表彰にはなる、捨吉は礼に来る。実に何事も思いが吐<sup>か</sup>  
 たのであるから大満足であつた。

然し氣にかゝる事があつた。それは捨吉の白米の一件である。



思いもかけず、捨吉が突然、最上等の白米貳俵を返して以来、自分はどうすればよいかと迷った。貰つて置いたらよいものか、壹俵だけではどうしても返すべきか、と、とっおいつ考えてばかりいるが、心が定まらない。

一時は、有頂天になつて表彰騒ぎに呑み廻つた酒もようやく醒めて来た。

然し、信哉が

「自分が本当に悪い者だとわかれば、表彰されるのはずかしいことだ」

と云つたことがある。又、

「五分五分の相対から出たものならば、善も、悪も共に苦悶の種子となる。恩を受けて苦しむ。恩を施して苦しむこれが凡夫の人生である」

とも言つた。

願れば自分はその善い事を捨吉にしてやつた。うれしかつた。その次に捨吉が返礼をしないと憎んだ。死んでも死にきれないと恨んだ。

しかし、捨吉は、いかにもはれん／＼として

「私が悪う御座いました」といつた時には櫂の棒で頭をなぐられた様に痛かつた。彼奴に負けた、彼奴に負けた。という思いが、どうしても募るばかりである。

彼奴はその上にまた、栗だ、黍団子だと、氣樂に家へ持つて来た。……自分の心はたまつたものではない……。まるで返す事も

ばかり居るのが苦しい。又捨吉の氣樂そうなのが羨しくてしょうがない。

## オ七 自棄と酒

善兵衛は捨吉のようになれぬ、捨吉に敗けてくやしい、と毎日じり／＼していたが、遂に「何葉、捨吉のどこが善いんだ、俺は俺だ」と言つて、久しく止めていた酒でも飲んで苦しみを紛らそうというので晩酌を始めた。この歳になつて又始めた。今までは銚子一本で酔つたのが、今度は二本、三本と段々手があがつて仕様がな。老婆はそれを見て、おそる／＼

「お前さん、止めていた酒をまた始めたのかい。若い時に、わたしは大分それで苦労したが、年寄りには酒は毒だよ」

「何、安い酒は毒だから、日本清酒、一級酒を買つて来い」と怒鳴つたら、たまげて、息子が自転車で農協へ走つた。後で氣の毒と思つたが、行きがかりだもの、負けられるものか。

それが一週間続いた。二週間、三週間、ついに、一月たつても止まぬ。

分家の主人が来て、老婆に小声で「表彰されてとんだことになつたなあ」と云えば、婆さんは「一級酒が三日に一本づつなくなると嫌いな」

それが三ヶ月続いた。しまいは家の者がニガ虫をつぶした様な顔をしているのが氣にいらぬと怒鳴つて、バスに乗つて、町に出て呑むようになった。然し何処で呑んでもさつぱり面白くな

出来ない高価な親切や感謝の押売をされている様なものだ。自分の何処を探しても、そんな珍しい宝は持合せがないから困る。

なぜ自分は捨吉をそのまま、素直に受け容れられないの、だらう。以前には、捨吉はひどい恩知らずだと頼にさわつてばかりいたが、今度は恩を返されるたびに、……また負けた、また負けた……と氣がひける。

昔、分家の婆さんが入院したとき、見舞に、雞卵だ、魚だ、カルピスだと、度々持つて行つたら、しまいに、婆さんが悲しそうに

「家は貧乏で、こんなに貰つても後で返せぬから、もう止めて下さい。御親切はもうこれで沢山だ」といつたことを思い出す。金持の自分は貧乏な捨吉から物を贈られて困つて居る。

自分の財産としては、米でも、栗でも、黍団子でも、返そうと思えば、いつでも、いくらでも、その何倍にもして返される境遇である。

然し捨吉の様な、あんな純情な感謝に満ちた、尊い氣持の贈物をする事は、今の私には出来やしない。自分は現に捨吉を、憎んだり、羨んだりばかりしている有様である。自分の心はどうしてこんなにひねくれて居るのか、自分ながら呆れてしまう。自分もどうかして、捨吉の様に、あの清々しい顔をして「私が悪う御座いました」と言つて捨吉の所へ行く様になりたいものだ。それが出来ないとは、自分はよつほどひねくれた根性の奴と見える。心が思う様に言うことをきかぬから困る。頼にさわつて毎日困つて

い。ついには居続けをして、三日も四日も家を明けて帰らぬ、たまに帰れば、

「俺がいないで、酒取りに行く苦労がなくてよかつたらう」とさへ毒舌をはくようになって来た。親類が心配して何か言え

「俺の財産を俺が使うのに文句は止めてくれ」という。善兵衛は有力者の家に生れ、勝気で、利口で、遣手である。家業の農業の外、材木の売買、牛馬の仲買などをやつて、大分儲けた。山師や博楽を相手に何でもやるから、目先もきき、氣も荒い。それで、親から譲られた財産を三倍にふやして、今では村一番の金持になつたのである。俺がふやした分を俺が使つて、それがどこが悪い、という腹である。

もう半年位も続く、村で、善兵衛がバスに乗つて出かけるのを見れば「表彰が酒呑みに行くよ」と藤口をきく者さえも出てくる始末、近頃は、表彰が善兵衛のあだ名とまでなつた。

表彰した村長も色々氣に病んで居るようである。何時の間にか、いろ／＼の噂が善兵衛の耳に入る。ます／＼頼にさわられる、ます／＼酒に耽る。

半年も過ぎた或日、善兵衛は目まいで倒れたというので、町から送られて来た。家の者も、親類も大騒ぎをして看病した。二日程食事もなくに取らなかつたが、十日程経つて少しは起きられる様になつた。もう命は助かつたが、その後、大事をとつて床の上にならねたり起きたりしていた。

床に寝て善兵衛は色々考えた。



……捨吉に負けたのが頼だといつて呑み出したのであるが、俺はこれからどうすればよいのだろう。捨吉を、貴様は恩知らずだ、俺に謝れ、と心の内で長い間、いつもく戦争して来た。ところが捨吉が思いもかけず、あつさりと謝りに来てしまつた。向うで降参したのだ。そうすれば俺は立派に勝つたわけである。それなのに、勝つてから、敗けて居た時以上に苦しみ出した。そして酒でまぎらわさねばならぬとは、心とは実に変なものである。

分家の婆さんが見舞に来て

「これは町から買った魚で、つまらぬものではあるが、食べて早く治つて下さい。あゝあゝこれでチツトは恩返しが出来た」と云つたが、婆さんの腹では、まだ沢山見舞の借りがあつた。今後それをどうして返すか、もし返されなかつたら、どうすればよいか、と心配しているように見えた。

それに他の奴等はどうだ、俺が苦しんで寝ている所へ、無理やりに来て、顔を見たり、話しかけたりしなければ、承知が出来ないという権幕である。病人のことよりは、自分が見舞に来た事を広告をしなければ掃れぬといわねばかりの振舞だ。なお見舞に来て、呑んだり、食つたり、今まで見舞をした分だけ取り返そうと意気込んではいやいでいるようだ。

捨吉の贈物は金である。いくら小さくても金である。粟一つでも金である。どんなに大きくとも、価値がない、メツキ物では比較にならぬ。

自分はいつ死ぬかわからぬ。この間のは軽い脳溢血であつた。

ある。

その翌日、善兵衛は捨吉の所へ使をやつて、御都合のよい時に来て下さい、と言わせた。捨吉は早速病室を訪れた。善兵衛は、「今日は、お忙しい所、おいでを願つて済みませんでした。早速おいで下されありがとうございます。」

ついでには先般下さつたあの白米貳俵のことですが、昨日までは貰つて置いてよいものか、返さなくてはすまいとか、壹俵だけはどうしても返さねばならぬとか、色々考えあぐんで居りましたが、今朝、心がままりました。それでわざ／＼お出でを願つたのです。本来は私から御伺ひして申上げねばなりません、病気で失礼します。御ゆるし下さい」と床の上にチャンと座つて、手をついて、

「あの白米貳俵は心よく頂きます。本当にありがとうございます。御座います。御厚志を頂いてありがたい。貳俵頂こうが拾俵頂こうが、又何も頂くまいが、唯御志をきけばそれで結構です。」とじつと捨吉を見た。捨吉は

「用とは、そのことか。わしもそれをきいて嬉しい」と涙組んだ。

善兵衛は信哉に手紙を書いた

「病氣も追々よくなります。捨吉さんとも、心よく挨拶が出来るようにになりました。信哉さんが捨吉さんへ下さつた仮名書は大変ありがたく拝見して居ります。ありがとうございます。御座います」と礼状を出した。信哉から早速返事が来た。

あれが重ければ一ぺんに死んだであらう。もう俺も六十過ぎだ。一度、本当に捨吉にあやまつて死にたい。俺は此の年まで名譽や、利慾のために人一倍働いた。そのため、それでもついに、村一番の金持になつたり、表彰されたりしたが、今になつて、あんな貧乏な、無学な、若僧の捨吉風情に敗けて死ぬとは、本当に馬鹿々々しい一生というものだ。あゝ自分は本当に馬鹿だ、我慢な奴だ。

オハ 病床の仮名書

善兵衛は考え疲れてひる寝をした。眼をさまして、ふと枕元に置いてある、信哉の仮名書を見た。

「じぶんのような、いつまでもく／＼がまんをやまぬ、わるいものを、かわいそうにおもひ、それをどこまでもあきれないおじひ……」

ここまで来たら涙が出て涙が出て先きが読めなくなつてしまつた。

「じぶんのような……どこまでもあきれない……ありがたい」と布団をかぶつてしまつた。人に見られまいと、さめざめと泣いた。

その夜、善兵衛は、皆が寝静まつてから、一人で何度も何度もあの仮名書を見た。

あゝ自分をこれ程までに思つて下さるお心をきけば、これでもう沢山だ。いままで捨吉に悪く思われるのも、敗けたのも当然で

「それはありがたいことです。一日も早く全快なさるようには。あの仮名書は、私が考え出したものでなく、全く恩師から教つたものばかりです。共にく／＼ありがたくいただきます。」

本当の表彰は天から下るものではない。こちらから注文せずとも、思いもかけず、仏の方から下さるのです。これが仏の慈悲です。」

梅の花が咲いたので捨吉は一枝持つて、善兵衛を訪ねた。そして里芋の一皿も忘れなかつた。善兵衛の家族とお茶を飲んで長く遊んで帰つた。里芋は捨吉の好物と見えた。善兵衛の床の間には、「山は山、道は昔に変わらねど、変わりはてたる我心かな」という掛物がかけてあつた。

春の暖かい日なので、捨吉を送り乍ら、善兵衛は藪を採りに共に野に出た。

この一本路こそ、ホントにあのみちである。太陽の光はうららかに二人を同じく照らした。

分家の伴と、本家の伴と、区長の伴とはここ十年の変遷を顧みて感慨無量であつた。

未完



編集後記

最近の美術について、北川氏の放送を聞きました。氏によると、現在では何処の展覧会でも、専門家は分らぬような絵が出品せられていて、これは原始人の描いた絵と共通な点があるようであります。それは原始人は天災地変とか悪疫流行という恐怖に無防備のままさらされていたので、そこに超人的な、鬼とか、天とか、神と云うものを大きく描いて、それを押込んで安全を祈っていた。それが段々と写實的に、具体的な絵となつて、美をたのしむようになっていた。ところが今度の大戰以來、原爆、水爆というとてもないものが出来て、全人類が防ぎようのない危険と不安に直面させられて、そこから超現實的抽象的な、一見得体の知れない絵があらわれ、共同の不安を持つ者が、それにひきつけられているようである、とのことでありました。これは独り絵画の領域ばかりでなく、奇や地上を覆う漫性化された不安の雲が、奇矯な現象をあらわしていることに気付かされて、今更のように驚ろかされました。

それにつけても、原爆水爆が一切を破壊する如くに、仏教語というものが、今やその本来の生命を失つて、死語、穢語となつてゐることの痛ましき！たとえば往生と云う語が、行き詰りや、くたばる意となり、他力本願が、依頼心の代名詞となつた等々、まことに原因はともあれ痛恨事であります。

私共は過去の善き師に遭ふことの出来る唯一の途は、言葉でありますのに、その言葉が汚染されて、通用しなくなつて了うた時、同時によき先哲からも別れねばならぬのであります。言葉は人類共通の宝物であります。五十年か百年の生命しか持たない人間の横暴によつて、千年、万年の光を掲げる言葉を破壊して意に介せないのは、その罪、謗法の最たるものであります。それにつけましても、先ず足下を省みて、言葉に三拝九拝の礼を取りたいものであります。

十二月は近角先生の御忌月でありました先生の歎異鈔の十三章の講義を頂きました又かねて頂いておりました松村さんや石原さんの御原稿を掲載させて頂きました。歳末匆々の時ながら、矢の如く、光の如く過ぎて、先生の教をおうけ下さい。

佐藤さんの「心の真実」は皆様から望望の声を承りますがこれから引き続き御読み頂きましよう。歳末御平穩に！

筆者の住所

東京都北区滝野川六ノ六八 石原 宥政  
山口県仁保局区内仁保 松村 繁雄  
新潟市関屋堀割三ノ十一 佐藤強三郎

御案内

十二月十七日午後、岡崎市大西、徳正寺。  
十二月廿五、六日、午后二時、桑名市伝馬町報恩寺。  
一月七日、十四日、廿一日、日曜午後一時半、一道庵日曜例会。  
毎月廿四日、午前、午后、昭和区小椋町教西寺、法話会。

定価 一部 二十円(送共)  
半年 百二十円(送共)  
一年 二百四十円(送共)

名古屋市南区新上町二ノ八八  
編集・発行人 花田 正夫  
名古屋市千種区千種町馬走二八  
印刷人 本田 政雄  
名古屋市南区新上町二ノ八八

発行所 慈光社  
振替口座名古屋一〇四七〇番